

1. 分類

言語喪失の現象は実に様々である。

○自然な言語喪失

Van Els (1986) による言語喪失のタイプを改変

		言語	
		L1	L2
環境	L1	タイプ 1 言語死 (例) ブルトン語(仏) アイヌ語(日)	タイプ 3 学習した外国語を失う 帰国者が現地で習得した言語を失う (例) 帰国生が母国に帰国し、滞在中に習得した言語を「忘れて」しまう
	L2	タイプ 2 移民などが移住先で母語を失う (例) アメリカで生活するベトナム 難民のベトナム語の喪失	タイプ 4 移民などが移住先で習得した言語が失われる

※この第 13 章では病理学的喪失を除いた自然言語喪失のうち、社会言語学的なものではなく心理言語学的な立場から、個人の言語能力の喪失そのものあるいはそのプロセスを対象とした研究を、タイプ 3 に限って取り上げている。

2. 研究成果—1980 年以降

(1) 要因

1) 経過年数

習得の機会や習得した言語が使用されている環境から離れてどれくらい経つか。

= 潜伏期 (incubation period), Gardner (1982)

・一般に潜伏期が長くなるにつれ、喪失の度合いも大きくなると考えられる(年数と正比例するものではない)が一方、学習後一定の期間を経て喪失とは逆に、能力の向上が見られたという報告も。

2) 熟達度

習得した第二言語/外国語の到達レベルによる

= 熟達度 (proficiency)

・熟達度の高い人は喪失しにくく、低い人は喪失しやすい。

Q なぜ? Neisser (1984) の見解 (& Pan & Berko-Gleason, 1986)

→ 決定的閾値 (critical threshold hypothesis) :

一旦ある決定的な言語の量 (critical mass) を獲得する or 閾値を超えると喪失しにくくなる

3) 年齢

子どもを対象にした研究では総じて要因として報告されている。

・吉田 (1988)

・Olshtain (1989)

→ 「退行仮説」

※一概に年齢のみを論ずるわけにはいかない

4) 読み書き能力

(読み書き能力の有無を単独の要因として検証すること→大人なら可能)。

→読み書き能力は習得後の言語保持に関与している

5) 動機と態度

・ (1985)

「フランス語やフランス系カナダ人に対して好意的でない態度を持っていること、及び使用機会が少ないこと」

「“話す” “聞く” の各スキルの喪失」

} 相関関係

・ Nakazawa (1999)

コースが始まる時に合った好意的な態度ややる気を維持した学生

→教室外でも日本語を使う努力をし、喪失を被らなかつた

やる気を失くした学生

→日本語を積極的に使おうとせず、喪失につながつた

動機のタイプによる言語保持への影響はなし

・ 中沢 (1989)—アンケート調査

保持の意欲の強さと喪失との間に明らかな関係性

保持の程度が高いグループは積極的に保持の対策を講じていた

(2) 喪失のプロセス

個人が L2/外国語を失っていく様子とは？

1) 喪失の曲線

○ 忘却曲線 (forgetting curve)

訓練終了後ただちに忘却が始まり、その後しばらく停滞期 (plateau) がみられる。

エビングハウスに端を発する。もとは心理学の分野の物だが、第二言語習得の分野でも追随する研究あり。

・ Bahrick (1984a, 1984b)

スペイン語の学習後の 5 年ほどは喪失が顕著でその後最低 20 年は保持の量が安定。

・ Weltens, van Els & Schils (1989)

フランス語を外国語として習得した学習者は最初の 2 年に喪失が見られ、その後停滞期に入った。

○ 逆パターン

喪失の停滞期が初めに来るパターン。

・ Weltens & van Els (1986)

喪失が顕著になる学習後 4 年までは保持の量が安定していた。

しかし、この場合には被験者皆の熟達度が高いという共通点。更に、次のような指摘もある。Initial plateau は単に一つ目の停滞期であったかもしれず、長期にわたってデータを見れば、その語喪失期、停滞期という伝統的な忘却曲線が現れた可能性も。

○ 第二言語の保持

最初に喪失はするものの、残りの容量は 25 年ほど保持可能。その後また喪失は起こるが、50 年以上は存在すると確かめられている。(Bahrick, 1984a, 1984b)

○ 子どもにおける喪失—

年齢以外の要因がかかわってくるので一概には言えないが、大人よりもその速度が速い。しかし、帰国生の親が報告には「あつという間に忘れた」という逸話が多いだけで、大規模な実証研究は少ない。

・ Allendorff (1980)

4~8歳の被験者は18ヵ月までにはほとんどL2喪失

- ・ Tomiyama (1999a, 1999b, 2000a)

日本の帰国生(開始時8歳)を帰国後2ヵ月~4年にわたって観察。最初の喪失の兆しは6ヵ月を経過したところで現れた。しかし、4年後にも受容能力のみならず産出能力も流暢さには欠けるものの保持されていた。

2) 喪失の順序

順序のあれこれ

①各言語学領域内での順

形態論のレベルで各形態素がどのような順で喪失されるか

#順序を予測する考え

○退行仮説 (regression hypothesis)

元は Jakobson (1968) が病理学的言語喪失の分野で述べた。喪失は習得の順の逆を辿る。

- ・ Olshtain (1989)

形態素レベルで年少者に関してはこの仮説支持のデータ。

- ・ Kuhbarg (1998)

ドイツで生活した2人のトルコ人の子どもたちを対象に、帰国後1ヵ月~20ヵ月に至るまで自然発話と誘出発話を収集し、自身が集めた習得データ(L1=トルコ語・L2=ドイツ語)と比較検討。

→前置詞、人称代名詞、法助動詞などにおいて習得とそうしつ(逆)の順が逆。

= 「最後に入ったものは最初に出ていく」

②各言語領域内での順

a 音韻、構文、語彙、統語のどの領域から喪失が始まるのか、さらには、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能の間で順序がどうなっているのか。受容能力と産出能力の間の順。

◇語彙の喪失が形態統語論的喪失に先立つ

◆文法面では喪失が見られたが語彙には見られず

熟達度とこの差異は関連?

→熟達度の高い人は文法の習得高いレベルまで進んでいるため喪失が起こりにくく、語彙の方はたくさんの語彙を習得しているため、喪失が起こりやすい。熟達度の低い人はその逆。

b 受容能力 VS 産出能力

退行仮説を支持する数多くの結果

- ・ 吉田・荒井 (1990)

日本の帰国生を対象、発話能力では特に年少者では帰国後かなり低下するが、聞き取り能力はほとんど落ちない。

- ・ Snow, Padilla & Campbell (1988)

産出能力の方が受容能力よりも喪失を多く、且つ早く被った。(産出能力内の「話す」「書く」の間に有意差はなし)

3) 補償方略

喪失を補うストラテジー

- ・ 放棄
- ・ 回避

- ・コードスイッチング=Kuhberg (1983) によればもっとも的確な要素
- ・言い換え
- ・遠回しな言い方
- +
- ・母語の転移

4) 検索

喪失の現象が現れるということは、心理学でいう、「検索」(=思い出すこと) が上手くいっていないと捉えることができる。

- ・減衰説

知識が全く失われてしまったため？

- ・検索失敗説

存在はしているが知識へのアクセスが上手くいかないため？

- 言語知識が元のまま存在
- 言語知識が変容して存在

OR

言語知識は存在しながら思い出せない？

3. 今後の研究の動向

今までの言語習得の事象の記述と実証研究による仮説検証に加え、新たな理論の構築や新たな仮説に基づく研究が進むだろう。

(ex)

以前: Yoshitomi (1994) による神経生物学的観点からの習得と喪失のメカニズムを包括的に論じる試み

以降: Bolonyai (1998、1999) コードスイッチングにおける理論言語学的バイリンガリズム研究で打ち立てられてきたモデルが言語喪失にも当てはまると主張する

- ・後退仮説

いつ、どんな状況、どんな場面で支持されるのか、またその起こるメカニズムの研究

- ・心理学における記憶研究—再学習の研究

再学習における節約効果を検証する

*節約効果=一度学習したものをまた学習する場合、初めて学習するより容易である。

4. 外国語(英語)教育への応用と示唆

日本人の語学学習観=英語の学習は忘れて「当たり前」

- ・決定的敷居を超える熟達度を目標としよう
- ・「読み」「書き」の訓練=保持に繋がる
- ・意識的言語学習: 文法などを意識的に教えた方が保持の可能性が高い

帰国生に対する英語教育

・語彙や形態素などの個別のスキルの訓練のみに終始せず、従属節を含む分の産出や会話を運ぶスキルなど、いろいろなスキルが必要とされるグローバルなスキルを駆使しなければならないコミュニケーションなタスクを与える必要がある。(小学生を中心とした保持教室に対する Yoshitomi, 1994 の意見)

5. まとめ

○喪失の要因に関して

様々な要因が挙げられたが、決定的な結論が得られたわけではない。要因間の創度作用も認められているため、単純に論ずることはできないのである。他にも要因は検討されるべきである。

○忘却のプロセス

様々な仮説が提示され、理論的構築も試みられてはいるが、更なる検討の必要性。

⇒要するに、更に発展することが予想されるのが言語喪失研究である。

そのためには心理学的知見や言語学的知見を土台にしていくであろう。

ダイナミックな言語を垣間見る現象として、また言語理論の心理的実在性を試す言語資料としても、その研究成果は今後も大いに期待される。

練習問題

基本問題

(1)「日本人が日本の大学でドイツ語を1年間学んだが、その後社会人になって使う機会もなくすっかり忘れてしまった」という例は、本文にもあるように van Els による分類によるとタイプ3に属するがmタイプ1~4までこのような喪失の現象の具体例をそれぞれ一つずつ挙げなさい。

・タイプ1: アフリカで話されている先住民族の言語かつ、フィールドワークも行われなかった言語が、母語話者がみななくなってしまうことで誰も知らないうちに喪失してしまう。

・タイプ2: アメリカ移民になった日本人

・タイプ3: 1年間台湾に留学したが、その後日本に帰国し中国語を使う機会もなくなりすっかり忘れてしまった。

・タイプ4: アメリカ移民が、幼少時はアメリカ人とも接し、英語の習得をしたが、小学校に入り日本人学校に通うにあたって英語を使わなくなり、せっかく習得した英語を再び話せなくなる、喪失してしまった。

(2) 本文に挙げた Godsall-Myers (1981)、Bahrck (1984a, 1984b, 1984c)、および Reetz-Kurashige (1999) は熟達度の定義としてそれぞれ何を用いているだろうか。その違いを確かめなさい。

Godsall-Myers (1981)

コース終了後の被験者の形態素、語彙、構文、読解、聴解、ライティングなどの収集されたデータの成績

Bahrck (1984a, 1984b, 1984c)

テスト(語順、語彙、イディオムなど)の成績。

Reetz-Kurashige (1999)

被験者の形態統語的発話データの分析より。たとえば、動詞句の文法的正確度など。

Bahrck はテストという被験者にとっても明示されたもの、それ以外は、一応、学習という場で行われたもののデータであるが、比較的自然産出データである。

○考察

今回は、言語喪失について。まだまだ研究の進んでいない、これからの分野であるということで諸説あり、もやもや、疑問が残るといふか、とても定まりのない分野だと感じた。しかし、これは今後、より解明されて行かねばならないものである。言語喪失はそのまま言語習得にも直結するものだと私は感じているからである。特に、授業中にも話題になった、「子どもは覚えるのが早い忘れるのも早い」という話。臨界期仮説がある一方忘れるのは早いのはなぜだろうか。確かに、私の経験上本当にそうだなあと感じてはいるが、それを理論的にどう実証することができるだろう。

たとえば、こんな仮説はできないだろうか。臨界期を過ぎてからまだあまり日のたっていない子どもは今まで話していた言語環境から離れてしまえば、新たな言語環境に身を置くことになる。そこでまた新たな言語を吸収していき、コードスイッチングが行われることになる。次第に、話さなくなった言語はいわゆる、“忘れ”られてしまう(今までの言語に触れていた時間も、子どもであるせいもあって少ないし、アウトプットで使っていただけであることが多そうである。教科書等の書き物でも使っていたのであれば話は違うかもしれない)のではないだろうか。

調べてみると、こんなことが分かった。年齢が低ければ低いほど早く忘れるというのは、「決定値閾値仮説」によって説明が可能らしい。そして、アメリカ合衆国による調査によると、英語に関していえば、そのレベルが Foreign Service Institute の基準でレベル 3 にまで到達していないと忘れやすくなってしまいうそうである。ここで、レベル 3 というのは、Professional working Proficiency と位置づけられ、「十分に正確な構文・語彙を用いて日常やビジネスの会話ができる。特定の分野については、議論も可能。ネイティブスピーカーの会話スピードでもほぼ完璧に理解でき、世間話で使うような語彙はほとんど身に付けている。発音を聞けばノンネイティブであるとわかるが、文法知識に問題はなく、誤りがあっても聞き手がネイティブであればほとんど理解は妨げない。」(服部孝彦; 2006『私たちはいかにして英語を失うか: 帰国子女の英語力を保持するためのヒント』海外子女教育振興財団)というかなり高度なレベルである。

なるほど、本当に言語を喪失しないというのは大変なことなのだ。どこでだったか忘れてしまったが、語学は運動、スポーツと一緒に聞いたことがある。言葉を身に付けるためには、それほど時間をかけて、毎日コンスタントに勉強していく必要がある、と。少々今までの内容とは話がずれたように感じるかもしれないが、FSI レベル 3 までに到達するよりも、その言語—つまりは英語—を忘れないように毎日コツコツ勉強していくことが一番の上達への近道なのかな、と思う。当たり前といえば当たりのことかもしれないが。その中で、レベル 3 に行き着ければいいし、といふか何より海外に行かなくともレベル 3 あるいはそれ以上に到達できるような学習方法を考えていくことが大事なのだろう。とても抽象的な?理想論的な話になってしまったかもしれないが、そう感じずにはいられない。

○参考文献

・服部孝彦; 2006『私たちはいかにして英語を失うか: 帰国子女の英語力を保持するためのヒント』海外子女教育振興財団